



續  
おしげ鳥

秋之部



園とわづらひかきり 詠や星の光 道立  
 世のたふ乃あゝも星のつねり 八田氏 亀友  
 君んよや只一は助り 阿戸の河 万容  
 きまらちねを夫婦とるるや河祭 その  
 はしきん 野しやて 天乃川 志慶  
 しものたふの 霧不銀河のこほれ 自笑  
 己んおあし 今宵もぬゆらむの河 鷺喬

家の間ばりしをばりの契を龜の  
ほり合乃とけいあしよの星 左繡  
船の寝て吉六百里の海 白砧  
鶴乃長抱もみらほり一夜大魯

洋丸焚香のつとめ誰も  
はあつたあつた危例のさういへ  
かみめさそいともむくつてや

襖の糸子砧をつり墨の状異 無腸  
あけいさうまのりて星はあつた二柳  
よみよをいさう星のさういへ 几董

六由も常ろあつた  
はひささかつ美角定雅の  
二子もあつた

美角

六日つれこの夜やほり  
うはさ新踏の月の音色 几董  
車押音あつたあつたあつた 定雅  
借もつて佩る太かの音あつた 角  
餅買つた酒の音あつたあつた  
あつたあつたあつたあつた 定

よこは乃も轉んてかたす石佛角  
腕のくまへ入血くけはキ  
夏もりの熱くせよる筆を、  
ありぬの灯のまおる土黒、  
志みやくと竹も竹ぬの音す、  
鳥羽田の沼の物り下飛キ  
百姓の心も深に家出、  
只きうくとと雷の音さ定

うしろのありをむのの懐く角  
圃とのあふりりぬまのキ  
舟のたむとともるや新鹿坂の下定  
大なる通るもま、  
子供多しは思もる中流を識仕キ  
夏をある人のま思あ定  
卯のの益の家、宿あり角  
世らういもさういせの、ほらキ

聾のなき醫師の娘と云々キ  
たうつ其暗く雛の眉うく 白  
牛比やまはるゝの吹雪り 定  
武者と七騎 門うとキ  
約物を夜半の手に持て 白  
月を菊の中へ かくは村雲 定  
橋はくは舟の入来る初汐にキ  
花うそ寒きと旅の水風と 白

ひるまを女ねらふの志のいそぎ 定  
唐能三番 ぬうはうらりキ  
蠟燭の風よ涼るゝぬの光 白  
色あき蝶のねとて 定  
花の夜よを食僧の連る 白  
他の國ある伯夷 叔齊 華

遊相國寺

大魯

影如く秋を知らざりし池の蓮  
 算策 月を風の色にうつら  
 月の夜よりのききし 宿直し  
 せうし乃 問ふの氣うらさく  
 花黄き酒の白ひの送る  
 是れをいひて 暮あそびを  
 大

一群よ 一向宗信の 京のゆかり  
 かほよをいふ女らんをかくる  
 住荒し 傾城町の夕日影に  
 して久しきまをいひてむ  
 田舎に 君めくしと 福を  
 むし雨をいして くらくく  
 こそを 舟唄をいひて 漕出す  
 新ぬきものをいして 僧  
 大

とある時 噴の福文にすたる  
なやいとこりし元日乃晨  
若水を流る波宿花の春  
着ちりい衣所うつる袖  
お御あて又あまきすし  
世もとも知りし座主の所心  
墨少る寒夜の外面あて  
清いよ 融よとく流り流  
大 大 大 大 大 大 大 大 大 大

又あまきすし  
長者をよとく流り流  
行徳流や里のあまの牛の数  
新いあまに山あけの花  
入月よ出るらういよ  
りさうと露けを三位殿の母  
土黒を流り流りあまの  
とく流り流りあまの  
大 大 大 大 大 大 大 大 大 大





舞やゆ星はさる 甲下 雲 亀衣  
唐落し舞の衣はたけ 蚊屋の外 女  
影影の島おのの 草の陽の 女  
島おのの 踊りし 人のむら 鹿 几董  
ひこや夫の鳴所さる 踊りの事 女村  
ねの音 ひとし

ふの袖くも 舞舞目の踊り 斗文  
くふくふの 拍子のあふ 踊り 百池  
くふくふの 踊りのあふ 踊りの事 伏水 浮水

踊る人のくくくやれの闇 定雅

自適

三十をさのげめやすものいぬ 道立  
踏もつて 四十を越ぬ相撲取 羅川  
川 踏し 踏もつて やすものいぬ 大祇  
竹伝心 踏もつて やすものいぬ 士喬  
くくくふくくく や勝相撲 几董  
乗あけの用戸のさる 山 旧國  
負あけの用戸のさる 山 舊村

おく家のこぼれはらへはらへ桔梗出石有橘  
ほろほろ中より立たぬをよめ人し 雪弓  
雨の日もあつた命もあつた女房の心 九湖

曉思貫

さびさびの紙の種もあつた  
待たせとてよ夕ほつとてまきこふ 霞東  
あはれこゝろもあつた神もあつた 家足

刺参の人

むねのむねもあつた志もあつた荷の種 賀瑞

秋風のこぼれはらへはらへ人を吹 標良  
夕月も誰やとてあつた萩の心 美角  
おぼろおぼろの影もあつた萩もあつた 稀彦  
小車のあつた伸してあつた量り 東壺  
痛き心もあつた虫もあつたあつた 茶列  
あつたあつた神もあつたあつたあつたのま 桐雨  
一日の夢もあつたあつたあつた  
生垣もあつたあつたあつたあつたあつた 正白  
名心の人もあつたあつたあつたあつた 路史

了れ其やいさかきつて一様  
竹裡  
は縁とて大和河丹入り来り  
霞夫  
秋のそやけいひはほの日暮り  
各喜ヤ 亞滿  
鳥の草とて何とてやう秋のそら  
眉山

河邊道遠

工とる唄り散おく秋のそら  
土川  
ふとちるや志のふの思乃んおが  
白堂  
花火のそ笑人の酒をか投らん  
イ重  
物替りてあやうの遠さかゝ舟  
岸村

利酒も酔あてもとてや秋の市  
ナコヤ 深央  
又う酔家の新酒のゆきよ  
ニ波  
八日さの釣のやと魚の店  
サガ 喜水  
紫のいしとては掃やとてあり  
田園

郊外

牛蠅いよをいよのふつあぶの  
秋の風芙蓉の館をかきけり  
暮太  
振上りて我もはゆめりあふこの蠅  
ナミハ 桃喬  
烟をかきとてとてとてとてとて  
乙総

舟待て背戸もさうれは秋の暮  
戸口のありし影も一は秋の暮  
さあれた日ありよきし秋の暮  
大七や僧もなきにあらざる  
山肆

清光

嵐の草乃甲よりけり月  
名月の君も遠かり病を癒  
けりの月濁さくむはやう  
船鳥や曉りけりさあのみ  
万容

良夜はあつてもつて花もさか  
もさかす

中くくし獨ちおそはれを女  
有のれや二るささうのを川のを  
月ハ秋ハ物思ふのちんのり  
道立

湖上眺望

あつた月也幸あつたの想せよこの世  
十とあつた月也幸あつたの想せよこの世  
黒谷の神もねり月の夜川か  
風りねしあつた月也幸あつたの想せよこの世

廣島

几董

青雨

木暮

曉臺

物毎の満るらひや一十三夜 宋阿  
白居 化世堂  
士巧  
守一  
曹文 俊元  
弄我  
生佛  
野菊 田平

二三大人ぬのさきしや落しぬ月溪  
からりい山田實のせなぬ心蓮  
旅中佳節一

馬の背のうささのきくさるるの毛 移竹  
盆月さるぬさき菊の蒼のぬ  
よお枝のさ終の葉のぬたぬ几蓮  
其中さく白菊の先を伺ささる月居  
佛壇の十日の菊乃ささる蝶々  
雞爪の嵐のささるお佛堂御風

けいこゝの始終をさるの盛ある 徳野  
えぬれさや門田のつきの窮なき 文皮

傲老杜博衣

よりのおろし我夜ほくはるか 大魯  
片くつら月おの暗のきぬは 菊尹  
雨をわて出ささつこくめは 鳴鳳  
わね徳隣のお年戻りりり 春蛙  
くまのな心よとさくさめさ 亦白  
ひよのまゝの漸馴るゝ夜の花が 兼蓮

夏我よこさぬこころ今又止 兼村

秋聲

途坂乃町や針研く指す秋心董  
層々しあまほ半とこあがり 我則  
形寒や背戸の草堀佛の目 嵐甲  
あまのひゆる入著るる指をば 月居  
稚子のともいげちるる夜長は 士川  
秋の戸よ倚れ袖との鼓あめ 鐵僧  
秋もさるる子ある鹿の舞 松宗

於金福寺興行

正白

とよみ大ふとくくちりし夜寒

書をよみ窓の両間の二月 松宗

鶯の仲ろ鶉をいしを鳴かぬ 道立

旅のめづるふる業をそとふの春 白

猛電子翹の濱焼ふをくくし 蓮

いぬ殿けくくの影持くくむ 立

春のよからぬ衣紋を吹れくる 白

ちやうち霞む島系乃口 蓮

くち悉の果やを食の物位む 立

誰の佛の及く入るぬ 白

世のつれづれいづくれ五位の 物 蓮

車子の月の影くくむあえ 立

羽虫の巻わくくは海流性 白

平家語り一人消るる 蓮

不吉

武者彼乃我亦遠くさめく  
立 聲 撫 知 子 逢 途 白  
宗 鳥 子 乃 菜 花 賀 振 宗  
立 花 の ぬ 深 く 知 奏 子 ぬ  
白 ね ち ら 加 茂 の 川 原 を 歩 けり  
市 乃 叔 と 子 乃 法 の 身 董  
立 松 の 戸 乃 妙 ち ら 歌 を 居 けり  
白 葎 一 の 埋 二 筋 の 路 白

は み ち ら 草 鞋 を 産 く 履 白 董  
立 つ さ ち ら の り 酒 立  
白 ぬ ち ら を 梓 の ち ら けり  
白 同 隣 ち ら 中 の けり 董  
立 標 ち ら 雪 の 際 日 ち ら 取 けり  
白 標 胆 ち ら ち ら 勢 の ち ら 記  
白 ち ら ち ら を ぬ ち ら ぬ ち ら ぬ  
立 ち ら ち ら の ち ら ぬ ち ら ぬ 立



和さくさく雪ふりたるあしを  
田舎歌舞妓の昼のよはに  
さくさくあつめ志はなほ  
白鼻の神さくさくあつめ  
入日さくさくさくさく花の陰  
長柄の傘をさくさくさく  
白 董 宗 白 董

曾久安計可良壽

おののけ

とゆふ竹の葉すまのきれは  
影輝る影はのらあ初めは  
智入のさくさくさくさく  
おののけさくさくさくさく  
宵くの影さくさくさく  
天をさくさくさくさく  
さくさくさくさくさく  
正白 鐵僧 九董 我則 九董 宋阿

嘆峨の小春都のゆきしるゝあ 霞夫  
初やや兵庫の魚を何くも 白波  
似し申のさうよらうも 小来月 赤盛

返景

舟暮ふ淀舟をたや拵をまか 几重  
舟の音深も入くはを乃止 名古屋 事紅  
一むらり平ぼすちのや構 万代  
唐新構のものをあやや女形 太紙

姑の鬼ももはる十のあかぬ 下総 閑袋  
姑乃初と詠ぬさきや大姫子 分二 半捨

夜坐

思ひ折ししはくくか夜の伝ゆ 無腸  
我のゆきま世の比乃ちおと 菰村  
紅国の足あつてもなびゆくのま キ重  
関やのゆかぬりこまき伝ゆ 出石 東季  
牛賣のよあつてもあつらん 乙総  
罪ゆきこ袖の下の歳衣あふ 管島

紙子着て了みのうらやせむ山肆  
着てゐてととらも止つ紙を片一嵐

無心無佛

こころも人の心をらむしらり  
こころも川流もたゞさう彼  
風りもさうらの霧る入日ある  
風やたつてはあね松のころを  
こころも油もさう石たか  
風や日も照り雪もいふあはれに

あつたふりかたのし

炉屏やと哀へんおるたのさび  
悔いもや炭の香さる人の息  
もの思ふさうさうはる炭のおおき  
煙ゆるや助炭のある所の音  
炭を枕下アゆるもあはれこのか

十月既を

こころはくちくち月らん  
こころはくちくち月らん  
こころはくちくち月らん

(5)

ふるふるの火、獨りなをささきとあかす  
九湖  
かつと毛の散日、いぢりたふり知り  
守大  
くへい、嗚の清ら、雲おひり  
瓢子

老懐

くらくくと生へくも、おや、蟻、碎、二柳  
耳かきし、薪の、雲、乃、きり、雲夫  
谷、拵、して、らん、や、雲、松、の、山、う、つ、由、翁  
霜の月、漁村、へ、た、り、沈、ま、り、一、音  
雲の、歎、す、啤、聲、を、握、り、り、大、暮

洛東乃正何所  
橋より

曉臺

日の、影、や、雲、を、つ、ら、つ、夕、眺  
く、の、も、よ、う、た、お、の、ぬ、相、几、董  
よ、う、し、酒、を、賣、群、の、軒、か、り、我、則  
胡、の、國、へ、書、も、も、め、去、蕪、村  
牧、を、出、て、つ、れ、駝、の、月、を、あ、ふ、一、音  
あ、ぬ、く、ら、な、草、を、も、よ、る、原、則

多るも元しむらねを辨れむを村  
世のさうさいの民とに借( ) 臺  
かうはなつともを董いおまおん 音  
はー居とらふたごるを 則  
月をせはし藤の蔓れちちり 董  
加持の奇特の昂をを地す 音  
後おある童あこころの産る 則  
罪もくはくふ有職のあふ 村

葩剪とつりもの焦ぬる雨の日は 臺  
法の因こり一大事一ツ 董  
花の容横ほの察る雛持え 音  
了らぬを摘ある透垣の下 則

若ら半しゆら比ぬるはる  
明れぬおののさうら  
各おさるりし年かき  
五也

み夜興

身を控ゆる雪の影路は 几重  
我もくもあまのの声 興は 樽良  
世の深く隙を引たるも 野  
百のくくさめ 家居しとら 嵐甲  
難切の秋よかや 宵の月 良  
得も人をゆく 此のころは 筆

下略

ふつ雪も消れそと 又 竹の家 蕪村  
初雪や 才島の玄猪の荒つらし 斗文  
雪とけぬ雪もあつや 簑の笠 太祇  
流り若るけな 文とらん おのころ んめ  
雪さん 塊 つむよる 道立

或時文のほりやを

大雅堂

雪ふゆさやうけの 投りし 雪の  
積るはら 只さあまの 小雪あめ 美ら  
舞と魚指し 雪の中 几重

ゆるめりた善のひらうの葉おど 弄我  
おの情月ゆるま阿の夜露 曉臺  
雪の出し 雪消る人跡の残り 一音  
音のこぼ馬もひらうのひらぬ 蝶々

燕 竜安寺

祭ゆるや夕日にみ入水のまわ 几董  
水鳥のかしら並しおらひ 布舟  
夜とらり足をぬりしおらひ 芸村  
おのらやとけし氷らりすれあ 一龍

ゆるめりたの招のほふも落しあ 自矢  
えるより霧霧の中の時勢 三曉  
用水の月ももしく氷のさ 覆東

夜行

松の梢の江の音は 鴨の舌 雷夫  
那のぬやわしぬふらふかいつち 几董  
皮剥の葉もんとさる枯母 一  
よそくこの日のゆふとく 枯野 麥水  
よのみあきとちあをわぬ田丸 太祇

わらわも若りよの舟川の底 移竹  
内海の権りもさうりよと流るる下 几圭  
西のそしひうしあしよる流るる下 蕪村

病後

かゝ蛙もあつりよ我皮肉もか 暁臺  
乾鞋や弄りよ分つ響音あり 蕪村  
雪國へ帰るよあつりよあり 田福  
夜を好む我も癖ありおれ新 定雅  
煮凍りや拾子のひを洩月夜 雁宕

煮凍りや精進ある程の癖 未量  
月言のをもを香りの白ふ海篇 士巧  
いこゝろに旅俗もあつり細き汁 月居  
飽喰り酒を下戸の思ひぬ 太祇  
寝喰り妹の住居もあつり 嵐山

對僧

佛燻してさうの思を考つたふり 道立  
静しよも物の思もあつり 家足  
俗つた物音もあつり 榎良



秋のささげのふりかへるを宿郷り 可重  
四叶のふりかへるを宿郷り 石友  
冬木も五月骨籠り 入宿り 几重

野行

ぬくくと涼走りぬやまの火入 集馬  
水辺のふりかへるを宿郷り 中重  
寒梅や雪のふりかへるを宿郷り 藤太  
善哉や文貫行よおとろくに 優才  
うらみのふりかへるを宿郷り 百池

家のささげの酒ゆるしけりきさる 嘉  
酔李白師走の市あはれなり 嘉  
ささげのふりかへるを宿郷り 正名

年月をささげのふりかへるを宿郷り

ささげのふりかへるを宿郷り 春の日の宿り 袖女  
ささげのふりかへるを宿郷り 田女

除夜

ささげのふりかへるを宿郷り 几重  
ささげのふりかへるを宿郷り 藤村

Handwritten text in cursive script, likely a letter or diary entry, occupying the right page of the manuscript. The text is written in a dense, flowing style characteristic of the late 18th or early 19th century.

Handwritten text in cursive script, likely a letter or diary entry, occupying the left page of the manuscript. The text is written in a dense, flowing style characteristic of the late 18th or early 19th century.

きんぎょのうたはしるしにふかきしるしのうた  
うきうきうきうきうきうきうきうきうき  
舞のまむとてうきうきうきうき  
十すぢあひまのまむとてうきうき  
世の侍やうきうきうきうきうき  
何れもえいふすぢあひまのまむ

無頼曲書

徳ともしの記念とてしるし紙衣

芳正

この句もまた追悼し  
せしこのうきうき出  
今見よすぢあひまのまむ  
つおの徳香うきうき  
正當の日涌るのほ解前  
うきうき懐舊のうきうき  
そのうきうき

九筆

十七年改定乃のうきうき

びく女誰れも糸を糸きん  
月くつくとくは溝おく水  
藁竹居家の重なるを  
豆腐煮こしき山ゆりの家  
這上る児を祖父のかつを  
降るぬ五りより虫多き  
きよのけしりせぬのよ苗を  
國替つしきぬひり果

移る世の悲女らぬあさうら  
讀佛棄の因とくし  
礼いしぬをを出るたぬふ  
ぬきぬれ唐のやう連ぬ  
露けつる岸の年指水車  
さうぬ指しはぬぬき  
さやむし新相人のたのめ  
昔相の九き同しき

安永丙申歲九月廿三日

几筆書

校合

万容  
白砧

彫工

九湖

書林

搦仙堂善兵衛  
吉田九郎右工門

